

探 究

探究 Co 便り 文：伊藤

令和6年7月23日（火）

NO.5

展開を生む ～4・6学年のチャレンジ～

4・6年異学年によるテーマ別総合は、前例のない大きな「チャレンジ」の実践であり、この実践を通して得られる手応え・課題は開智小の「探究」をつくる上での大変貴重な経験であると言えます。前例がないからこそ、先生方自身が日々、「探究」し「チャレンジ」をして、今日までの実践を紡いで来られました。その「チャレンジ」を少しでも共有できるように、私が見た取り組みの一部をご紹介します。実際と違ったらすみません！

テーマ別の探究が始まり、様々な場所で、様々な活動が動き始める中、江口先生・東條先生が担当する城下町グループでは、なかなか次の「展開」を生み出すことができずに悩まれていました。「活動が単発で終わってしまう」「調べ学習と探究の違いはなんだろう」そうした声は4・6年以外の先生方からも日々お聞ききしていたところです。

停滞していく子供達の様子を見た先生方が、次の一手としたのが、松本城管理事務所の研究員小山先生らとの「出会い」でした。その時間の様子を江口先生・東城先生が喜々として語ってくださいました。以下お聞きした内容の一部です。

お迎えした講師の先生のお話を、前のめりになって聞く子供達。お話には終始、驚きと発見の反応で応え、あっという間に過ぎる時間。その後、紹介された城下町の遺跡を実際に見学に行く計画がその場で持ち上がり、なんと夏休み中に見学に行くことまでがその場で決まる。

こうした思いがけない「展開」と、動き出す子供達のエネルギーはどこから生まれるのでしょうか。少し遠目にふり返ってみると、一見停滞に見られたこれまでの時間にも何かしらの意味や、転機となる芽のようなものがあったのではないかと考えたくなりました。江口先生はこの日のことを「出会いのタイミング」がよかったのだとお話されていました。こうした新たな「展開を生む」ところに、間違いなく「探究」の難しさはあります。しかし同時に、そこにこそ子供と分かち合いたい「探究」の魅力があるのです。（裏面へ）

「活動が活動を呼び込み、あたかも触手をのばすように『展開』し、網目の様に学びが広がっていく。ここに（総合的な学習）の魅力があるのだが、学びのねうちを見定める厳しさもある。思いがけぬ転回。それが鮮やかであるほどに私たちはそれを語りたくなる。」

『学びのゆくえ』牛山栄世 著

4・6年の先生方が、次の授業と「展開」について子供の姿を基に話し合う姿はもはや開智小の日常になりつつあります。そこで、私達もふり返ってみたいのは、日々の授業の中でどれだけ、この「展開を生む」という点に悩んでいるだろうかということです。子供の姿を見るまでもなく、素材の価値を見直す必要もなく、決められた時間に決められた活動をなぞり、パッケージのようになった題材をこなす中で、こうした悩みは生まれません。ですが、そこに本当に私たちが目指す「探究」はあるのでしょうか。教師自身の「探究」が、目には見えない部分で子供の「探究」を支えているのだと信じて、2学期も先生方と悩みやチャレンジを分かち合いたいと思いました。

